

## 西行の白峯詣をめぐりて

高橋貞一

### 一

西行が保元の亂後、讃岐に配流された崇徳院の御墓を訪ねたことは、山家集卷下の中に、

そのかみ心ざし仕うまつりけるならひに、世を遁れて後も賀茂にまゐりけり。年高くなりて、四國の方修行しけるに、又歸りまゐらぬ事もやとて、仁安二年十月十日の夜参りて、幣まゐらせけり。内へもまゐらぬ事なれば、たなうの社に取りつぎて参らせ給へとて、心ざしけるに、木の間の月ほのぼのと、常よりも神さび哀れにおぼえて詠みける。

かしこまるしでに涙のかかるかなまたいつかはと思ふ心に

とあって、仁安二年十月、四國の方へ修行に旅立つたと思はれ、又同じく山家集卷下に、

讃岐にまうでて、松山と申す所に院おはしけむ古跡尋ねけれども、かたもなかりければ、

松山の波にながれてこし舟のやがて空しくなりにけるかな

西行の白峯詣をめぐりて

松山の波のけしきはかはらじを形なく君はなりましにけり  
白峯と申す所に御墓の侍りけるにまゐりて、

よしや君むかしの玉の床とてもかからむのちは何にかはせむ  
とある。西行の白峯詣の説話は山家集がその源であらう。古事談卷五の最後に、

西行は俗名佐藤兵衛尉義清、散位康清之男云々、讃岐松山津という處にて、新院御座しけむ跡を尋ね侍りけるに、形もなかりければ、

松山の波に流れてこし船のやがてむなしくなるにけるかな  
と打詠めて、しるみねと申所の御墓所に参りて、

よしや君むかしの玉の床とてもかゝらん後はなににかはせん

とあるのも、山家集によつたものであらう。これを文學作品中に脚色したものは保元物語が最初であらう。しかし保元物語については多くの異本があり、問題があつて、ここに詳細を説くことは出来ないが、筆者がかつて論じた如く、流布本は室町時代に下つて、壺囊抄などによる増訂があり、暫くおくとして、異本としては、金刀比羅神社藏本が最も古い詞章を有する傳本として紹介したことがある。國文注釋叢

書、保元物語中に翻印、昭和二十七年、講談社刊。その後同本は岩波古典大系に收められて、昭和三十六年刊。この時保元物語の解説に於て、永積安明氏が、半井本（彰考館藏）をより古態であると述べられたので、筆者との間に意見の対立を見るに至つたのである。半井本の本文は筆者が未刊國文資料として昭和三十四年刊行したことがある。この永積氏の所論は、半井本が記録的、年代記的で説話的傾向を持つに對し、金刀比羅神社藏本は、先例典據の權威をふまえて述懐したり、和歌や古典的文獻を援用したりして、貴族たちの悲運への詠嘆を盛りあげており、亂の結末も、半井本が爲朝説話でもつて終り、武家に重點をおいた事實をもつて感慨を述べるのに對し、金刀比羅神社藏本が、王朝を中心に、その安泰と恢復とを亂の結末にすえているのによつても、兩類本の發想と作品構成法の基本的な相違は明らかであると述べて、半井本を前出としてゐるのである。これは鎌倉初期成立の作品として、精神史からいつても逆に考ふべきで、武家政權の確立によつて王朝的なものが消滅して行くのが常識である。又保元物語の傳流に就いても、保元物語が琵琶によつて語られた點が全く考慮せられてゐない本文推定である。金刀比羅神社藏本より半井本へと流傳した筆者の推定に従へば容易に解決すべき本文が、半井本より金刀比羅神社藏本への場合には説明し難い點が極めて多い。その一例として金刀比羅神社藏本に爲朝の鬼島渡りの事が無いが、これを載せないのは何故であるか、半井本、流布本にのみあつて、金刀比羅神社藏本以外の多數の異本にもなく、又京師本の如く、これを附載した傳本のあるのは如何に説明すべきか、など首肯し難い點が多い。しかるに岩波古典大系の

解説を信奉する學徒も多い。従つて西行白峯詣においても、果して永積氏の説が妥當であるかどうか再検討する必要がある。

次に平家物語の異本である長門本平家物語、源平盛衰記、延慶本平家物語などの記事もこれと深い關係がある。

## 二

保元物語の著作年代としては、六代勝事記に異本保元物語（金刀比羅神社藏本）が引用せられて居るので、承久の亂頃には成立してゐたと思つて差支がないと思ふ。詳細は文學、昭和三十二年三月號に發表した拙稿にゆづりたい。この異本保元物語を基として記述されたのが長門本平家物語、源平盛衰記、延慶本平家物語である。しかし延慶本平家物語以外は成立年代が不明である。ここに問題がある。保元物語の流傳上の變化推移と、平家物語傳流における増補變化との交渉、文學史上、説話の發展消長を如何に意味づけするかといふ點である。

異本保元物語卷下によれば、仁安三年秋の頃、西行法師が諸國修行中、四國の邊地を巡見の時、讃岐の白峯に崇徳院の御墓を尋ね、荒廢した有様を歎いて、邊りの松をけづつて、哀悼の文を書き、崇徳院の御生涯を追慕して慰め奉り、

松山の波にながれてこし舟のやがてむなしくなりにゆるかな  
といふ歌を感得して、

よしや君昔の玉の床とてもかざらん後は何にかはせん

と御返歌を奉るのである。これを更に細かく見れば、(一)御墓の荒廢した有様を述べ、「況や法華三昧勤むる禪衆もなければ、貝鐘の音もせ

ず、後夜晨朝に念佛する僧侶もなければ、三響の響も聞えず……」とあり、次に、松をけづりて、(二)哀悼の文として、「昔十善萬乘主、耀錦帳於北闕之月……夜雨難防矣、みがかれたまのうてなをつゆふかきのべにうつしてみるぞかなしき」と書き、(三)懷舊追慕の語として、「世を治め國を治めさせ給ふ事十九年……前世の御果報の拙くましましけるに依つて、今かかる邊域の塵土とならせ給へり。……長生不老の門をたて、蓬萊不死の藥を求めさせ給ひしに、今は雲上の榮花夢の如し……」と述べ、(四)「松山の波にながれて」の歌を感得して、「よしや君昔の玉の床とても」と御返事を申しあげたのである。(二)の「みがかれたまのうてな」の歌は、山家集卷下によれば、「近衛院の御墓に人にぐして参りたりけるに露のふかかりければ」といふ詞書があるので、白峯の御陵ではなく、保元物語作者の作爲である。

この西行白峯詣を半井本について見るに、卷下に、

西行法師讚岐へ渡りたりケルニ、國府ノ御前ニ參テカクゾ讀タリケル、

松山ノ浪ニユラレテコシ船ノヤガテ空ク成ニケルカナ

白峯ノ御墓ニ參テツクト候、泣々カウゾ仕リケル、

ヨシヤ君昔ノ玉ノユカトテモカ、ラン後ハ何ニカハセン  
怨靈モ靜リ給フラムトゾ聞シ。

とある。半井本は西行法師の白峯詣には深い關心もなく、二首の和歌を添加したに過ぎない。これをよくみるに、山家集によりて書かれたものとは認め難い。「國府ノ御前」は、山家集では、松山にての詠であり、半井本の「ツクト候」も、或る語を省略したといふ印象が

ある。又最後の「怨靈モ靜リ給フ」には物足らぬ感があり、何かを省略したといふ語感を伴ふ。この半井本と流布本保元物語とを比較するに、流布本では、

仁安三年冬の頃、西行法師諸國修行のつゝあてに、白峯の御墓にまいりて、つくくと見まいらせ、昔の御事思ひ出奉て、かうぞよみ侍りける、

よしや君むかしの玉の床とてもかゝらむ後はなに、かはせむ  
治承元年六月廿九日、追號ありて、崇徳院とぞ申ける。

とあつて、流布本は半井本よりも更に簡略で西行法師の説話は消失しようとしてゐるのである。これを前述の永積氏の説の如く、半井本——金刀比羅神社藏本——流布本と認められるであらうか。筆者には、金刀比羅神社藏本より次第に簡略化せられて、半井本の如くなり、更に流布本に至つたと認められるのである。

次に長門本平家物語では如何であらうか。卷四に、

去仁安三年の冬の比、佐藤兵衛入道西行、後には大法房圓位と改名しける。國々修行しけるに、讚岐の松山といふ所にて、是は新院の渡らせ給ひし所ぞかしと思ひ出奉て参りたりけれども、そのあとも見えず、松の葉に雪ふりかゝりつゝ、道を埋みて人の通ひたる跡もなし、なほ島より志度といふ所にうつらせ給ひて、年久なりにければ、ことわり也、

よしさらば道をばうづめつもる雪さなくば人の通ふべきかは  
とうち詠じて、白峯といふ所の御はか所に尋参りたりけるに、怪しの國人の墓のやうにて草ふかくしげりたり、いかなりける御宿業に

て渡らせ給ふやらんと心うく覺えて、昔は十善のあるじとて、九重の内にまつはれてむかし暮し給ひしに、今は三途の闇にまどひて、八重葎の下にふしましくけん、かなしからずといふ事なし、翠帳紅圍の中には、三千の主と仰がれ、龍樓鳳闕の中には、二八の主とかしづかれ給ふ、辨才世にかまびすし、威徳朝にふるひ給ひしに、徒に名ばかりとゞまるならひなれば、宮もわらやもはてしなし、世の中はとてまかくても有ぬべきかなど、思ひつゞけてつらくと、御墓所のまへに候へども、法華三昧つとむる禪侶もなく、念佛三まい勤むる僧も一人もなかりければ、

なほ島の波にゆられて行く舟の行衛もしらずなりにける哉

とよみたりければ、御墓震動して、俄に黒雲うづ巻、眞黒さまになりけり。斜ならず御憤り深かりけるを、行衛もしらずと讀みたりけるを、御とがめありて、あしく讀奉りけるにやと、ひぎをのけ、袖かきつくろひて、

よしや君昔の玉のゆかとてもかゝらん後は何にかはせん

と讀みたりければ、御はか元の如くしづまらせ給ふ、この歌に怨靈も御心なだまり給ふらんとぞ覺えし（圖書刊行會本一五二—三頁）

とある。保元物語と異なる點は、崇徳院の怨靈の出現である。俄に一夫曇りて黒雲のうづ巻いたという異變である。この文は恐らく西行物語と關係があるのではなからうか。西行物語、神宮文庫藏の永正六年寫本によれば、

讃岐院松山の津と申ける所にわたらせ給ひけん御事を尋まいらせて行たりけれども、その跡もなくならせ給ければ、いとゞ物うくおぼ

えて、かやうにぞながめける、

松山のなみをはなれてこし船はやがてむなしく成にける哉

又白峯と申御はか所に行て、拜見に、昔はこれ十善萬乘のあるじとして、九重の玉臺にすませ給しかども、今はみつのやみにまよはせ給て、むぐらが下にかくれさせ給ける哀さ限なく、有爲無常は、とてもかくてもありぬべき世間、たゞ宮もわらやもはてしなきためし、殊草の影にてもさこそ思召らんと思て、

よしや君昔のたまのゆかともかゝらん後はなにゝかはせん

とあるのが注目せられる。傍線を付した所は類似する語で、長門本は西行物語に基づく所があつたのではなからうか。西行物語も異本が多く、西行一生涯草紙（史籍集覽）には、

新院かくれさせ給てのち、四五年ばやりありて、さぬきのまつやまのつといふところにつきて、故院おはしましけむ所たづねけれども、かたもみえざりければ、あはれにおぼえて、

松山のなみにながれてよる舟のやがてむなくなりけるかな

松山のなみの心はかはらじをかたなくきみはなりましにけり

さてしろみねと申所に、御はかの侍けるに、まありてみれば、そのあともみえず、むぐらおひしげりて、いつこそ人のかよひたりともみえざりければ、そのかみ御くらゐの時、一天四海をなびかして、百官のつかさに圍繞せられて、關白大臣いさゝかも勅定をそむかじとおそれ、ことばの御まなじりにかゝらんと出仕の人々は、いのり誦經せしぞかし、いまは佛法の名字もきかぬ山の中に虎狼野干をともにて、かたばかりの御すみか、あはれになみだおさへがたし、

よしや君むかしの玉のゆかとてもかゝらん後はなに、かはせんとある。この方は長門本とは關係がないやうである。さて長門本には、保元物語にない歌が二首ある。「なほ島より志度といふ所にうつらせ給ひて、年久なりにければ、ことわり也」といふ語は、松山とは關係がない。崇徳院が讃岐の國にて先づ國府の近くに遷され、次に直島、それより又志度へ遷されたにせよ、松山と志度とは同一ではなく、この記述は長門本の誤りと認むべきである。異本保元物語と關係のある所は、「法華三昧つとむる禪侶もなく、念佛三まい勤むる僧も一人もなかりければ」といふ語が類似する。長門本を基として保元物語が成立したとは考へられない。長門本作者は、異本保元物語の(一)(三)を同一にして脚色したと考察すべきであらう。然し、「松山の波にゆられてこし舟のやがて空しくなりけるかな」の歌は載せなかつた。

次に盛衰記は、卷八、讃岐院事に、

鳥羽院の北面に佐藤兵衛尉義清と云ひし者道心を發し、出家入道して西行法師と云ひけるが、大法房、圓位と改名して、さんぬる仁安三年冬の比諸國修行しけるが、中比のすきものにて、東は壺の石、夷が島、西は金の御崎、松浦の沖、名所舊跡の歌枕をふみ、見ぬ所はなかりけり、不破の關屋に留まりては、月には雲のふはといひ、武藏野を過ぐるとては、柏木の葉守の神を恨みけり、實方の中將の墓にては、一村薄を悲しみ、白河の關にかゝりては、關屋の柱に筆をどゞむ、四國の方の修行を思ひ立ちける時は、江口の妙に宿をかゝり、假の宿と讀みしかば、心とむなど返しつゝ、一夜の宿をぞ借に

西行の白峯詣をめくりて

ける、讃岐國へ入りて松山の津と云ふ所に行きぬ、こゝは新院の流されてわたらせ給ひける所ぞかしと思出し、昔戀しく尋ねまゐらせけれども、其の御あともなかりければ、龍顔奉公の古より、鵝王歸依の今までも、御事忝く哀れに覺えければ、

松山の浪に流れてこし舟のやがてむなしく成りにけるかな

と打詠めて、支度と云ふ山寺に遷らせ給ひても年久しく成にければ、御跡なきも理に覺えて、御墓はいづくぞと問ひければ、白峯と云ふ山寺と聞きて尋ね参りたりけるに、あやしの下藹の墓よりも猶草繁し、いかなる前世の御宿業にかといと悲し、昔は清涼紫宸の玉臺に四海の主とかしづかれおはしましたしに、今は民屋白屋の外土に八重の葎に埋もれ給へる事、御心うき事なれども、翠帳紅闌の中に三千の君と仰がれ、龍樓鳳闕の上に二八の臣と崇められて、辨才世にかまびすしく、威勢朝に振ひし人々も、名ばかり留まる世の習ひ、咸陽宮も徒らに片々たる煙と昇り、姑蘇臺も空しく瀟々たる露繁し、宮も藁屋もはてしなし、とてもかくても世の中は、唯かけるふの假りの宿、すみはつまじき所なりとて、西行古き詩を思ひ出でて、松樹千年終是朽、權花一日自成榮と詠じつつ、暫くここに候ひければ、も、法華三昧つとむる、住持の僧もなく、燒香散華を奉る參詣の客も無かりけり、いと物さびしかりければ、

よしや君むかしの玉のゆかとてもかゝらんのちは何にかはせんとある。構文は長門本と極めて類似する。即ち傍點を附した所は殆ど長門本と一致する。又長門本の誤りと認むべき、「志度と云ふ山寺に遷らせ給ひても年久しく成にければ」がある。長門本は、「なほ島よ

り志度」とあるが盛衰記はなほ島がないので、松山から志度にうつられた意になるであらう。保元物語流布本に、

かくて八年（直島）おはしまして、長寛二年八月廿六日に御とし四十六にて、志戸といふ所にてか、れさせ給けるを、白峯と云所にて煙になし奉る。

とある如く、志度にての崩御といった傳があつたためであらうか。又盛衰記は傍線を附した語を添加したと認むべきであらう。この逆に、盛衰記を簡略化して、長門本が成立したとは本文の潤色からも認め難い。盛衰記の方を後出と認むべきで、盛衰記はこの西行白峯詣の後に、西行發心の由來を戀故として潤色を加へ、崇徳院を主體とした叙述から、一轉して西行を中心としたテーマに移つて居るのを見ても首肯せられるであらう。盛衰記の右の文中、二八の臣とあるのは、長門本の二八の主とあるべきところ、威勢朝に振ひし人々とあるのは、崇徳院をさすべき所に、臣下をあげて、威勢のあつた人々もその跡が無常であるとするのは適當ではない。

次に長門本、盛衰記と關係のあるのは、延慶本平家物語である。卷第一末、西行讚岐院墓所ニ詣ル事に、

仁安三年ノ冬ノ比、西行法師後ニハ大法房圓位上人ト申ケルガ、諸國修行シケルガ、此君ノ事ヲ聞テ四國ヘ渡リ、サヌキノ松山ト云所ニテ、是ハ新院ノ渡ラセ給シ所ゾカシト思出奉リテ參リタリケレドモ、其跡モミエズ、松葉ニ雪フリツ、道ヲ埋テ人通タルアトモナシ、直島ヨリ支度ト云所ニ遷ラセ給テ三年久ナリケレバ理ナリ、吉サラバ道ヲバ埋メ積ル雪サナクバ人ノ通フベキカハ

松山ノ波ニ流シテコシ船ノヤガテ空クナリニケル哉

ト打詠ジテ白峯ノ御墓ヘ尋參リタリケルニ、アヤシノ國人墓ナムドノ様ニテ草深クシゲレリ、是ヲ見奉ルニ涙モ更ニ押ヘガタシ。

以上の文は殆ど長門本平家物語と同文で、傍線を附した語が長門本に増補せられた語である。「此君ノ事ヲ聞テ四國ニ渡リ」は不適當な語で、崇徳院の事は西行としては十分に承知の筈である。「松山ノ波ニ流レテ」の歌は山家集によつたか、保元物語によつたか不明である。「直島ヨリ支度ト云所ニ遷ラセ給テ三年久ナリケレバ」は長門本の場合と同じく、松山と何の關係もないことで、誤りであるが、三年は延慶本の誤りで、「久ナリ」と合はない所である。延慶本の編者のミスである。次に、

昔ハ一天四海ノ君トシテ南殿ニ政ヲ納給シニ、八元八愷ノ賢臣左ニ候シ右ニ隨奉リキ、王公卿相雲ノ如クシテ、萬邦ノ隨ヒ奉ル事草ノ風ニ靡ガ如クナリキ、サレバ二六金殿ノ間ニハ、朝夕玉樓ヲ瑩キ、長生仙洞之中ニハ、綾羅錦繡ニノミマツハサレテコソ明シ晩シ給シニ、今ハ八重葎ノ下ニ臥給ケム事、悲トモ愚也、一旦ノ災忽ニ起ツ、九重ノ花洛ヲ出テ、千里ノ外ニ移サレテ、終ヲ遠境ニ告給ヘリ、先世ノ御宿業ト云ナガラ、哀ナリシ事ゾカシ、御墓トオボシクテ、方間ノ構有ドモ、修理修造モナケレバ、ユガミ傾テ鳩萬ハイカ、リ、況ヤ法華三昧動ル禪侶モナケレバ、貝鐘ノ音モセズ、事問參ル人モナケレバ、道フミツケタル方モナシ、昔ハ十善萬乘主、耀錦帳於九重之月、今懷土望郷之魂、混玉體於白峯之苔、朝露尋跡、秋草泣添淚、向嵐問君、考檜悲傷心、仙儀不見、只見朝雲夕月、法音

不聞、又聞松響鳥語、軒傾曉風猶危、臺破暮雨難防、宮モ藁屋モハ、テシナケレバ、カクテモ有ヌベキ世中カナト、ツクタク、昔今ノ御有様トカク思ツマクルニ、不覺ノ涙ゾ押ヘガタキ、カクゾ思ツマケル、

ヨシヤキミ昔ノ玉ノ床トテモカ、ラム後ハナニ、ニカハセム

サテ松ノ枝ニテ庵結テ、七月不斷念佛申テ罷出ケルガ、庵ノ前ナル松ニカクゾ書付ケル、

ヒサニヘテ我後ノ世ヲ問ヘヨ松跡忍フベキ人シナケレバ

とある。傍線を附した所は保元物語の語と同一で、保元物語による増補と認むべきである。「昔八十善萬乘主」以下の漢文の所で、保元物語に、「北闕之月」とあるのが、「九重之月」となり、「南海之浪」が「白峯之苔」となり、「拂露而尋跡」が「朝露尋跡」となり、「佛儀」を「仙儀」と誤り、「夜雨」が「暮雨」となつてゐる。これは延慶本の編者が作爲的に改めたものと認むべきであらう。又傍点を附した處は長門本と類する所である。以上長門本、盛衰記、延慶本の三本を比較するに、延慶本は長門本に保元物語（金召比羅神社本の如きもの）を以て増訂したことは疑ひのない所であらう。延慶本の成立は、赤松俊秀博士の説く如く、鎌倉初期とは認め難く、延慶年中よりはやや廻ると認めるのが適當であらう。これらの三本は西行に對して深い關心を示して居ることは注目すべきである。

沙不集卷五末に、

西行法師國々修行シケルニ、讃岐國ノ御墓ニ詣テ、昔十善ノ餘薫ニヨリテ、萬機ノ政ヲヨサメ、四海ノ帝王トシテ、九重ノ臺ニアガメ

西行の白峯詣をめぐりて

ラレテ御坐シ事、思出ラレテ、今邊州ノカスカナル松山ノ苔下ニ、ウヅモレテ御坐ス事、無常轉變ノ世ノ理ヲシルト云ヘドモ、夢ノ心チシテ、哀ニヨボヘケルマ、ニ、カクナム、

ヨシヤ君昔ノ玉ノユカトテモカ、ラム後ハナニニカワセム

御返事ニ、カスカニニコヘケル、

ハマ千鳥アトハミヤマニカヨヘドモ身ハ松山ニネヲノミゾナク

コレラノ歌ハ、ヨノツネ二人ノ口ニツケタレドモ、シヅカニ詠ズル時ハ、萬縁悉クワスレ、一心漸クシヅマルモノヲヤ。（岩波古典大系本二五〇頁）。

とある。無任が、「コレラノ歌ハ、ヨノツネ二人ノ口ニツケタレ」と述べてゐるので、この記事が直接何を出典としたかは明らかに出来ないが、長門本と一部類する語もあり、保元物語によつたとすれば、「ハマ千鳥」の歌は、西行の歌に對する返歌ではなくして、崇徳院が五部の大乘經を書寫した後に、都へ送られた時の御歌である。したがつてこれは無任の記憶の誤りとすべきであらうか。

次に選集抄卷一の讚州白峯之事がある。略本にはない。選集抄の本文は、保元物語以下、長門本、盛衰記、延慶本と直接關係はなさそうである。

清涼紫宸の間にやすみ給ひて、百官にいつかれさせ給ひ、後宮後房のうてなには、三千の翡翠のかむざしあざやかにて、御まなじりにかゝらんとのみ、しあはせ給ひしぞかし……他國邊土の山中の、おどろのもとに朽ちさせ給ふべしとは、貝鐘のこゑもせず。法花三昧つとむる僧一人もなき所に、たゞ峯の松風のはげしきみにて、鳥

だにもかかけらぬありさまを見奉るに、そゞろになみだ落し侍りき。刹利も首陀もかはらず。宮もわらやも、ともにはてしなき物なれば、高位も願はしきにあらず。

とあつて、傍點を附した所が他の文獻と類するのみである。選集抄の成立年代も不明であるが鎌倉末期には成立して居たと認めてよいであらう。

源平鬪諍録は、崇徳院の崩御を述べた後に、

其比或者有見夢想事、仕讚岐院御興、自内裏左衛門陣、欲奉入供奉輩、保元合戦之時亡爲義忠正家弘等者、皆悉候御共、此内裏八大明王奉守護之間、無可入給隙候申、然仕清盛宿所奉入太政入道西八條見後、入道悪行隨日而勸矣、

去仁安三年戊子冬比、西行法師改名被云圓位聖人、修行國々、臨讚岐松山、抑此新院渡給所奉思出、雖見回敢無其跡形哀覺給、

松山流浪來船之懸空成矣哉

御墓聞有云白峯所、詣彼所奉見、無勤法花三昧之僧一人、如怪國人墓草深難分、昔九重中被纏綾羅錦繡御衣、明暮給、今伏八重律下給悲、聖人向居御墓、一々乍觀世間無常、思連斯、

吉哉君昔玉床亦有右後爲何

負寄立木本、結構柴庵七日七夜勤行、奉祈過去聖靈出離生死、非可有然申暇、自御墓出、書付二首歌、

此又我住憂浮者松獨成耶爲

引替我後世問松可慕跡無人身

これは大略長門本の如きものに據つたものであらうか。但し夢想の

事は、長門本卷四、西行白峯詣の事の次に或人の夢としてこれを載せ、盛衰記は卷十二に教盛の夢としてあげ、延慶本にはなく、半井本保元物語のみに、讚岐院崩御の事の次に、

蓮如ガ夢ニ見タリケルハ、讚岐院ノ四方興ニメシテ、爲義父子六人先陣ニテ、平家忠正父子五人、家弘父子四人後陣ニテ、院ノ御所へ打入ントスルガ、追歸シテ、爲義御興ノ御前ニ馬ヨリ下テ、院ノ御所ニハ不動明王大威徳ノ禦ガセ給候間、エ参リ候ズト申ケレバ、サラバ清盛ガ許へ昇入ヨト被仰ケレバ、無相違打入テ院ヲモ入進ツト見タリケレバ、其後清盛次第ニ過分ニナリ、太政大臣リ至リ、子息所從ニ至マデ、朝恩肩ヲ並ル人ゾナキ、ヨゴレル餘ニ院ノキリ人中御門ノ新大納言成親父子ヲ流シ失ヒ、西光父子ガ首ヲ切、攝録臣ヲ備前國へ移奉リ、終ハ院ヲ鳥羽殿へ押籠進スルモ、只讚岐院ノ御崇トゾ申ケル、其後讚岐院方々へゾ御幸成ヌト見進セテハ絶入シ、爰ニ御幸成ヌト見進テハケ殺シ進ケリ、西行法師讚岐へ渡リタルケルニ……(前述参照)

とある。これは鬪諍録とも關連があるが、直接保元物語によつて鬪諍録が成立したものでなさそうである。長門本は或人の夢物語として、頼長左府の仰で院の御所法住寺殿へ行けと仰せられた。所が忠正が、院の御所は日吉三王の御宿直が固くて叶はないと申したので、さらば西八條へと仰られたとある。これが最も古い形態であらう。盛衰記には、教盛の夢として、爲義が讚岐院の張興をかついで何處へ入れ申すべきといへば、忠正が法皇の御所法住寺殿へといふに、爲義が、それは叶ふまじ、院の御所は天台座主御修法にて不動大威徳が守護し



て輒く入れ難いとなつてゐる。保元物語半井本は、これらの諸本の何れかによつたものであらうが、金刀比羅神社本などにはなく、後の増補と認むべきで、又流布本にはこの夢想の事がある。これも半井本が後出の性格を示す一證左である。鬮評録が院の御所とせず、内裏としてゐるのは不適當である。

### 三

以上、西行の白峯詣の記事を中心にして、保元物語以下の諸作品を比較したのであるが、保元物語異本に於ては、金刀比羅神社藏本を以て最も初の形態と認むべく、半井本、流布本はその簡略化された跡を示すものであるといふべく、長門本、盛衰記、延慶本の三本の關係は、長門本が古く、それを増訂して盛衰記が成立し、延慶本は長門本を基として、保元物語を以て増補したと認むべきである。他に選集抄があり、源平鬮評録があるが、その本文は何によつたか明らかでない。然し次第に西行に關する記事が簡略になつて、西行に關する關心が薄くなつて行つたことは、保元物語の記述の上からも推定出來さうである。<sup>④</sup>

### 【註】

- ① 壺囊抄と流布本保元半治物語、拙稿、國語國文 二八年六月號。
- ② 平家物語諸本の研究附録、一八年八月刊。
- ③ 文學作品の文學的性格と優劣とをも合せて考察すべきものがある。金刀比羅神社藏本の優秀なるものに對して半井本の劣つてゐる點も吟味すべきものがある。

西行の白峯詣をめぐる

④ なほ一例として半井本卷中の義朝の奮戦について見よう。

義朝是ヲ見テ不安ト云テ、懸出トシケルヲ、乳子ノ鎌田次郎正清申ケルハ、コ、ハ大將軍ノ蒐ベキ所ニハ候ハヌゾ、千騎ガ百騎ニ成、百騎ガ十騎ニモ成、十騎ガ五騎三騎ニモ成テコソ、大將軍ハ軍ハシ候ヘ、大將軍ノ離テ敵ニ合事未承及候ト申共、猶カケント勸ミ給ヲ、物具シテ步行ナル兵八十人有ヲ、正清招テ、大將軍蒐サセ奉ナ、敵ノ陣ノ内ヘ入奉ルベカラズ、兵左右ノ水ツキニ取奉レ、尻胸當、胸ニ取付、搏ミ付キ能々守護仕レト申バ、七八十人ミナ大將軍ノ前後左右ニ立圍テ守リケルハ、只樊噲ガ如シ、樊噲ハ漢ノ高祖ノ郎等也、未高祖沛公ト云シ時、項王ニ取籠レタル時、樊噲大將ガ取籠ラレタル由聞テ、百人シテ押タル門ヲ押開テ、楯ヲ峙テ敵ヲツキマロバシ、項王ノ庭ニ向テ主ヲ守リケル、目ノホコロビ悉サケニケリ、甲ヨリ白髮銀ノ針ノ如ク皆透テンゲリ、項王何物ゾト問給ヘバ、沛公ノ郎等樊噲ト名乗、ナマシキ猪ノ肉ヲ肴ニテ酒ヲ進ム、楯ヲ伏テ切板ニシテ切食、酒ヲ給タレバ、安タト一斗ヲ飲、サテカ、ルケギレニ主ハ力付テ逃ニケリ、其様ニ是等ガ八十人ノ中ニ取籠テ守リケリ。左程ニ清盛三條ヲ川原ヘ打出テ、スデカヘニ東川原ヘ打渡テ堤ヲ上リニ寄セケルニ……。

鎌田正清が義朝の進出を留めた條である。金刀比羅神社本等にはなく、半井本にのみある。この場合に樊噲をとり出したのは適當な事例ではなからう。永積氏が金刀比羅神社本にいう典故を持ち出す性格は半井本にもあるし、この記事が流布本には、もつと簡略化して、

下野守は矢合に郎等を射させて、やすからず思はれければ、既にかげんとし給へば、鎌田次郎正清善に取付て、爰は大將軍の懸させ給ふ所にて候はず、千騎が百騎、々々が十騎に成てこそ、打も出させ給はめと申けれども、猶かけんとし給ふ間、歩立の兵、八十餘人有けるをまねきよせ

て、此由をいひふくめ、大將を守護せさせ、正清馬に打乗て眞先にこそすすみけれ、安藝守は二條河原の川より東、堤の西に、北へ向てひかへたり。

とある。この本文推移こそ琵琶による簡略化と認むべきである。半井本↓流布本の流傳は疑ふ餘地がない。金刀比羅神社本は全く關係がないのである。

⑤ 註④参照。

⑥ 平假名交り十一行書寫、袋綴、卷末に、「洛陽二條鳥丸秋野々道場、稱名寺彌阿彌陀佛、于時永正六年己巳卯月廿九日書之」とある。

⑦ 以下すべて流布本は慶長古活字本による。岩波古典大系所收。

⑧ 古典研究會、三十九年六月刊、第一冊四二七頁。

⑨ 未刊國文資料所收。

⑩ 江戸時代に降つては、上田秋成の雨月物語の白峯があり、幸田露伴の二十日物語がある。これについては他日を期したい。